

# 「気候変動とSDGs:国際舞台の表裏と日本」国際セミナー

災害復興制度研究所顧問

岡田 憲夫

## 1.はじめに

本年10月31日から国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議（COP26）が英国グラスゴーで開催されている。日本からも、総選挙を終えたばかりの岸田文雄首相がかけつけ日本の目標について演説した。

このように自然災害の頻発などにも関わる気候変動とSDGs（持続可能な開発目標）は21世紀の国際社会の重大な政策課題となってきた。

このタイムリーなテーマを取り上げて、災害復興制度研究所の「持続的地域復興国際研究会」では、赤阪清隆氏を招いて国際セミナーを開催した。日にちは10月1日（金）14:00-16:00、場所は本研究所会議室で対面とZoomによるハイブリッド形式で実施した。

## 2. 講演概容

講演者の赤阪氏は我が国の著名な元外交官であるが、同時に国際機関で多彩な体験と活躍をされている。日本が重要な役割を果たした1997年の京都議定書（Kyoto Protocol）づくりにも事務方として加わられた。経済協力開発機構（OECD）事務局（パリ）事務次長も務めた。2007年2月、潘基文国際連合事務総長により広報担当事務次長に指名され、広報局のヘッドとして、情報戦略、コミュニケーション等世界中の国連広報センターを統括した。講演では、このような国際舞台における「気候変動」、「SDGs」をめぐる各国の駆け引きや国際機関が果たしてきた役割などについて興味深いエピソードも紹介された。

講演内容は（1）気候変動:国際的な枠組みと最近の関連行事、（2）SDGs（持続可能な開発目標）（2015-2030）から構成されている。以下は岡田が目指したポイントのみに絞って記す。

### 1997年の京都議定書（Kyoto Protocol）

赤阪氏は格別の高揚感のあった体験を語った。同時にその反省点として、①温室効果ガス、シンク、排出量取引など未知なことが多いにもかかわらず、合意を急いだ。②法的拘束力のある議定書・削減目標にこだわった。③途上国はフリーハンド、自主的参加すら見送った。④先進国の負担の決め方が恣意的だったことなどを指摘した。

### 2015年にパリで開かれたパリ協定

京都議定書の後継として2015年にパリで開かれたパリ協定は、温室効果ガス削減に関する国際的取り決めを話し合う「国連気候変動枠組み条約締約国会議（通称COP）」で合意された。パリ協定の問題点として赤阪氏は以下の点を挙げている。i) 共通の長期目標は、努力目標ではない ii) 実現性の乏しい2～1.5度の各国目標では、気温上昇抑制目標が実現できない iii) 温暖化効果ガスの各国の排出削減目標に法的拘束力がない iv) 遵守規定、罰則がない v) 中国、インドの目標が低すぎる。



### 2015年採択のSDGs（持続可能な開発目標）

2015年9月の国連サミットで全会一致で採択された。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標を設けた。

普遍性・包摂性・参画型・統合性・透明性を旨とする。先進国を含め、全ての国が行動する。人間の安全保障の理念を反映し「誰一人取り残さない」ように全てのステークホルダーが役割を担う。社会・経済・環境に統合的に取り組む。定期的にフォローアップする。

赤阪氏はこのSDGsの前身として、日本の貢献が少なくなかったミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）にも触れている。開発の数値目標（MDGs, SDGs）の生みの親は日本であった。これは1996年のOECD開発目標からスタートしたものである。

### 我が国の貢献可能性

大気汚染対策、省エネ、医療保健、教育、大都市の交通対策、廃棄物処理、食品ロス対策、里山里海などの生物多様性の保存、少子高齢化、東日本大震災からの集団防災移転促進事業、多自然川づくりの経験などを、赤阪氏は挙げられた。

### Can I do without it? – Jane Goodall

イギリスの動物行動学者で国連平和大使の、この問いで講演を結ばれた。

## 3. 質疑応答で交わされたこと（例）

- ・気候変動SDGsは途上国の人には現実的に聞かえないのでは？ SDGsは経済的な成長だけではなく、環境、人権、貧困、平和を国際的に、包括的に達成するのが目的で、途上国にとって切実な課題であることをどう伝えるか？ 日本は海外支援で地道に果たしてきた実績も活かすべき。
- ・自然エネルギーを活かす上で脱石炭の動きはあっても、脱原子力にはつながらないことが悩ましい。
- ・SDGsは大切な目標で賛同できても、現実はどう実現するか？
- ・地球環境の危機としてまったなしとみる若い人たち、グローバル資本主義にはとられない発想や生き方を志向する若い世代も生まれている。今後、彼らが主導して変えていく知恵をどのように引き出していくか？
- ・消費を減らし節約することだけではなく、これをSDGsとして進める新しい暮らしや仕事のスタイルを生み出す fund-raising につなげていけないか？

最後に、「日本はどのような国の形をめざすべきか？」「経済大国はもはや現実的ではなく、日本は中堅の尊敬される国を目指すべきではないか？」といった見解も示され、大変広がりのあるセミナーとなった。